

瞑る

野の切株に坐る
腰の 暗いところで
広がっている 波紋

どこかの昔から 剥がれたように
蝶が 飛んできて
老いた膝小僧にとまる
そこから

全身寂寥になつてしまつて

ただ 樹の悲鳴の昨日を見あげる
震える葉が いっぱい

次第に空っぽになつてゆく顔を
まっさおに染めあげる

蝶がふつと飛びたつ
唇から声にならない声をさらつてゆく

その羽音にならない羽音を聞いているうちに耳を
盗まれそうになる
青という青の葉むらの昔に溺れているうちに瞳を
拉致されそうになる

そのときだ

何かが

私の 目を

大きく 瞑る

突然浸されてしまふくらやみのなかで
私は驚く

驚いてしろくひらいた 目の
なかの目をもまた
瞑る
何か が

私の 明日をも 瞑ってしまえば
私は生きたままで
死ぬかもしれない
死んだままで
生きるのかもしれない

切株から腰を上げ
大きく野を深呼吸して

還ってくる
目へ

枝と空

ある日 枝が
空をあきらめる

うれしそうに とも かなしそうに とも言えるし
どちらでもない とも言える

枝は どれも

枝を 伸びていて 伸びているばかりで

その端っこで ふっと

枝をやめる

(気づいたら やめていた というように)

それぞれやめたところから

空が広がっている

わけではない

空はもともとあつて

枝をひっぱっている

わけでもない

ただ 空であつて

枝は その ただ をあきらめる

そういうものだから

(と仮につぶやいているのかもしれないが)

で

葉が

散る

すすき

気がつくと
土手の ひとときわ丈高いすすきが
話しかけている

のは ぼくではなく

ふりむけば

むこうの川岸の

やや首をかしげて川波のひかりにまみれている
別のすすきに だった

風が空つぽの顔を吹き抜けていったのでそれとわかった

すすきになりたいと

切なく思う

すすきになりたいすすきになりたいと

一千万回唱えても

すすきにはなれない

すすき

と 深くつぶやけば

すすきの影の影のそのまた影くらいには
なれるが それも

一瞬のこと

すすきになれば

すすきと話すことができるのに

すすきになれば…

摘む

野の花を
摘んでいると
なんだか

摘まれているのだ
顔が 青空のようにひろがって
そのずうっとむこうから
そのときどきの
ときどきの
うえで
ゆれながら やって来た 目の
ひとつひとつを
摘まれているのだ

花を

摘むのは せめて
昨日の 相変わらずのみすぼらしさの
でもきらきらとしてた自分に
捧げたいと思っただけなのに
だから決して
いやじゃなかったのに
花に
摘まれるなんて
摘まれてしまうなんて

見えない明日に
花のように
拐かされるなんて